

戦国時代に生きた窪川の豪勇

中西権七物語

中西権七
戦国時代、中村一条家の与津浦(興津)代官を勤めていた中西筑後守の一族で、主殿を持たない野武士としての生活を送っていた。
生来の強力者であるとともに文武に長じた侍でもあった。権七は4尺8寸あまりの長太刀を差し、高木履で郷内を闊歩していたという。

別誂えて刀工に作らせた一回り大きい長太刀の抜刀術習得のため、仁井田郷総鎮守の五社に願をかけて百度参りを行い、毎夜、興津の真砂を袋に詰めて参拝し、遂にその技を身につけた。満願成就のお礼として五社・興津八幡宮にこの長太刀が奉納されている。

仁井田五人衆の中で最大の勢力を持つ窪川氏よりその能力を買われ仕官するように請われたが権七は公家(一条家)に仕える一族の矜りからこれをはねつけたため、窪川氏より追われの身となり、ついに五社の祭日の日に(諸説有り)襲撃される。

このとき屋敷はすでに焼き払われ、妻子は興津領に逃避中に相次いで討たれた。(石塚が残る)権七も一条家領である幡多に向かう途中、若井川・冬越にある高ノ峠で非業の最期を遂げる。

近在の者は、この豪勇を慕い、戦いの神としてこの最期の地に葬った。

はるか戦国の時代、矜りをもって権力に服することなく、豪快に、そして颯爽と駆け抜けた権七ゆかりの史跡が数多くのこされています。

●文献●
「窪川町史」
「中西権七一代記」
「権七の太刀」
●監修●
林一将

